

報 告

大学生のボランティア経験とボランティア観 — 至誠館大学生の実態について —

國木孝治*1

キーワード：ボランティア経験、ボランティア観、大学生、至誠館大学、スポーツボランティア

1 はじめに

1.1 研究に至る背景

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会（以下「東京 2020 大会」）^{註1)}が、2020 年 7 月下旬から 9 月上旬にかけて新国立競技場（東京都新宿区）^{註2)}を主会場とし開催される。東京 2020 大会では、競技が行われる会場や大会運営に直接携わるボランティア活動を行う「Field Cast」と、空港や主要駅、競技会場の最寄駅周辺等における観光や交通案内に携わる活動を行う「City Cast」と呼ばれるスポーツボランティアスタッフが募集され、80,000 人の募集に対し 204,680 人の応募者があった^{引1)}。

このように、スポーツボランティアをはじめ、ボランティアという言葉の認知度や活動に参加することの意識はいっそうの高まりをみせており、大学において授業として開講しているケース^{註3)}や、東京 2020 大会に関連する公開講座等が開講される大学や地域が増えてきている。

ところで、ボランティア (Volunteer) の語源はラテン語の voluntas (ヴォランタス) である。自由意志や自主性、あるいは志願兵といった意味があり、ボランティアとは「自発的 (Voluntary) に行う人」と解釈される。中央社会福祉審議会によると^{引2)}、ボランティアは「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献すること」と定義され、その基本的な性格として「①自発性 (自由意志性)、②無給性 (無償性)、③公益性 (公共性)、④創造性 (先駆性)」を挙げている。また、東京ボランティア・市民活動センターによると^{引3)}、ボランティアは「自発的に (自発性・主体性の原則)、

他者や社会のために (社会性・連帯性の原則)、金銭的な利益を第一に求めない (無給性・無償性の原則) 活動」と捉え、ボランティア活動の 4 原則として「①自主性・主体性、②社会性・連帯性、③無償性・無給性、④創造性・開拓性・先駆性」を挙げている。このほか、金子は^{引4)}、ボランティアする人とは「あるきっかけで直接または間接に接触するようになった人が、なんらかの困難に直面したとき (中略)、その状況を「他人の問題」として自分から切り離れたものとはみなさず、自分も困難を抱えるひとりとしてその人に結びついているという「かかわり方」をし、その状況を改善すべく、働きかけ、「つながり」をつけようと行動する人」と述べている。

ではボランティアという言葉はわが国においていつ頃から使われるようになったのか。

仁平によると、戦前におけるボランティアに関する初出論文として「東京市立大塚市市民館長の内片孫一が書いた「隣保事業に於けるヴォランチアの役割」 (1932 年) と、青山学院大学教授であり愛隣団セツルメント総主事だった谷川卓夫が大阪社会事業連盟の『社会事業研究』に書いた「社会事業に於けるヴォランチアに就いて」 (1937 年)」^{引5)}であると述べている。また、仁平らによると、ボランティアという言葉は大阪ボランティア協会などの団体が 1965 年頃から使用されるようになり、「1968 年の世論調査では「ボランティア」という言葉を「知っている」と答えた人が一割ぐらいでした。知っている人でも、「施設で活動する人、奉仕者」という理解だったと思う」^{引6)}と述べている。

*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

その後、1970年代に文部省が生きがい対策、生涯学習の文脈でボランティアという言葉が政策に入り、本格的なボランティアの育成や、ボランティアという言葉が広がり始めていく。そしてさらに拍車をかけた事象として1995年の阪神淡路大震災後のボランティア活動や、1998年に施行された特定非営利活動推進法(NPO法)等が挙げられる。

ボランティアの概念の変容について、仁平らによれば、NPO法施行後、それまでボランティアは無償であることが大事にされていたが、「無償型では人が集まらないし、収益性が見込めないとシステムとして回らない。システムとして回らない活動というのは、結局のところ社会を変えられないのだから、お金儲けを敬遠するのではなくて、うまくやってみよう^引」⁶⁾という考え方へと変容してきたと考察しており、ボランティアの原則の1つとして挙げられている「無償性」は、時代や社会の変化とともに変容してきていることが窺える。

1.2 先行研究の検討

「ボランティア」をキーワードに検索を行うと、数多くの研究の蓄積がみられることが判る。この内、若い年代におけるボランティアの参加実態や意識についての研究としては、荒川ら(2006)による高校までに経験したボランティア体験と大学入学後のボランティア観との関連性についての報告^リが参考になる。この報告によると、調査対象者の約8割がボランティア活動の体験を有しているが、小・中・高等学校の学校教育下の中で体験したボランティア活動の中には非自発的な活動も含まれており、大学入学後のボランティア活動に繋がっていないこと等が課題として挙げられている。

このほか、音成(2019)による高校の部活動に所属する高校生を対象にしたボランティア認識に関する研究²⁾、同じく音成(2017)による大学スポーツボランティアのあり方に関する研究³⁾が挙げられる。これら研究の外観としては、高校生においては学校や教員、指

導者等の依頼を仲介する者からの依頼型ボランティアの割合が高く、ボランティアという認識が低く浸透していないことが示唆されている。他方、大学生においては、大学生のスポーツボランティア経験は6割を超えており、大学入学年次から3年生にかけて経験者数(率)は高くなることが報告されている。

続いて、スポーツボランティア活動に関する実態については、笹川スポーツ財団(2016、2018)による報告が参考となる⁴⁾。この報告によると、スポーツボランティア活動に対する実施希望率は15%前後で推移しており、実施率は7%前後、性別による実施率は男性のほうが高いと分析している。加えて、年代別での実施希望率は18-19歳が最も高く、次いで20歳代と、若い年代において希望する割合が高いことが報告されている。

1.3 本研究の目的

そこで本研究では、特定する1大学の大学生を対象として、ボランティア活動全般の参加の実態を把握すること、及びボランティア活動に参画している学生のボランティア観について知ることを目的とし、具体的には、1.ボランティア活動への参加の実態、2.ボランティア活動種、3.ボランティア活動への参加の動機、4.ボランティア観について、対象大学の特徴・特色を報告することを課題とした。

2 研究方法

2.1 調査の時期と対象

質問紙による調査を実施した。具体的には、2019年5月から6月にかけて山口県萩市に所在する至誠館大学(萩キャンパス)ライフデザイン学部・ライフデザイン学科に在籍する142名を対象に、ボランティア活動に関する実態と、参加動機、印象・イメージについての全数調査を実施した。有効回収数(率)は105名(73.9%)であった。

なお、対象とした至誠館大学萩キャンパスには1学部1学科3専攻(スポーツ健康福祉専攻、子ども生活

学専攻、ビジネス文化専攻)がある。2017年度より「スポーツボランティア論」「スポーツボランティア演習」科目が全学対象の選択科目として新規開講されており、且つ、スポーツボランティアをはじめとする各種ボランティア活動に積極的に参画している特徴・特色がある。

2.2 調査の内容

回答者の一般属性を知るための3項目(①所属(専攻)、②性、③学年)のほか、ボランティア活動への参加の実態を知るための4項目(④活動経験の有無、⑤種類、⑥動機、⑦印象・イメージ)についての各質問に回答してもらった。

2.3 分析の方法

一般属性と他質問項目間でクロス集計を行い、その差異について比較検討を行った。

なお、統計処理にはSPSS Statics Ver.25を用い、その際の有意水準は5%とした($p < 0.05$)。

3 結果と考察

3.1 ボランティア活動経験

表1及び表2は、有効回答者全員に($n=105$)、これまでのボランティア活動経験について尋ね、性別、学年別にまとめたものである。

その結果、「過去にボランティア活動をしたことがあり、現在も活動している」(以下「ボランティア経験あり(現在活動中)」)の学生は、性別で見ると、男性は約2割、女性は約1割で、男性の割合が高かった。学年別にみると、3年生(12.5%)が他学年よりも低い傾向がみられた。

他方、「過去にボランティア活動をしたことがあるが現在はしていない」(以下「ボランティア経験あり(現在非活動中)」)と「ボランティア経験あり(現在活動中)」を合わせた参加者は10割で、回答者全員がボランティア経験を有していた。他先行研究で報告されている結果よりも高い経験率であり、調査大学の特徴・特色として特筆すべき結果と言える。

表1 ボランティア活動経験の有無(性別)

	ボランティア経験あり (現在活動中)		ボランティア経験あり (現在非活動)		ボランティア経験なし		合計	
男性	16 (20.5) (84.2)	62 (79.5) (72.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	78 (100.0) (74.3)			
女性	3 (11.1) (15.8)	24 (88.9) (27.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	27 (100.0) (25.7)			
合計	19 (18.1) (100.0)	86 (81.9) (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	105 (100.0) (100.0)			

$X^2=1.196$ $p=0.274$

表2 ボランティア活動経験の有無(学年別)

	ボランティア経験あり (現在活動中)		ボランティア経験あり (現在非活動)		ボランティア経験なし		合計	
1年	6 (21.4) (31.6)	22 (78.6) (25.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	28 (100.0) (26.7)			
2年	10 (17.9) (52.6)	46 (82.1) (53.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	56 (100.0) (53.3)			
3年	1 (12.5) (5.3)	7 (87.5) (8.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (100.0) (7.6)			
4年	2 (15.4) (10.5)	11 (84.6) (12.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	13 (100.0) (12.4)			
合計	19 (18.1) (100.0)	86 (81.9) (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	105 (100.0) (100.0)			

$X^2=0.445$ $p=0.931$

3.2 ボランティア活動種

表3及び表4は、「ボランティア経験あり(現在活動中)」及び「ボランティア経験あり(現在非活動中)」の学生(n=105)に対し具体的な活動種について尋ね、性別、学年別にまとめたものである。なお、回答は7項目(1.社会福祉ボランティア、2.保健・医療ボランティア、3.自然環境ボランティア、4.地域社会ボランティア、5.教育・文化・スポーツボランティア、6.災害支援ボランティア、7.国際交流・協力ボランティア)の中から選択してもらい、多重回答式(複数回答可)とした。なお、割合については、回答者数に対する、各ボランティア活動の参加動機を選択した人数を示している。

性別では、男性は「教育・文化・スポーツボランティア」活動の実施率が最も高く(41.0%)、次いで「自然環境ボランティア」活動(39.7%)、「地域社会ボランティア」活動(35.9%)であった。女性については、1位2位は男性同様「教育・文化・スポーツボランティア」活動(51.9%)、「自然環境ボランティア」活動(48.1%)であったが、次いで「社会福祉ボラン

ティア」活動(37.0%)で男性の2倍を超える結果であった。

学年別にみると、1年生で最も活動率が高かったのは「自然環境ボランティア」活動(57.1%)で、他ボランティア種の中でも群を抜いていた。続いて2年生は「教育・文化・スポーツボランティア」活動(51.9%)が最も高く、次いで「地域社会ボランティア」活動(42.9%)。3年生は「教育・文化・スポーツボランティア」活動と「自然環境ボランティア」活動が同率(62.5%)であった。4年生については「教育・文化・スポーツボランティア」活動(61.5%)が最も高かった。1年生と234年生では高い値を示した活動種が異なっていたが、これは実施時期が5-6月であり、1年生は高等学校までの経験であることが考えられた。

これらの結果から、至誠館大学の学生は「教育・文化・スポーツボランティア」活動、「自然環境ボランティア」活動、「地域社会ボランティア」活動への参加が高い特徴がみられることが判った。

表3 活動したボランティア活動の種類(性別)

(%)									
	n	社会福祉	保険・医療	自然環境	地域社会	教育文化 スポーツ	災害支援	国際交流	合計
男性	78	12 (15.4)	8 (10.3)	31 (39.7)	28 (35.9)	32 (41.0)	6 (7.7)	7 (9.0)	124 (159.0)
女性	27	10 (37.0)	0 (0.0)	13 (48.1)	7 (25.9)	14 (51.9)	1 (3.7)	2 (7.4)	47 (174.1)
計	105	22 (21.0)	8 (7.6)	44 (41.9)	35 (33.3)	46 (43.8)	7 (6.7)	9 (8.6)	171 (162.9)

表4 活動したボランティア活動の種類(学年別)

(%)									
	n	社会福祉	保険・医療	自然環境	地域社会	教育文化 スポーツ	災害支援	国際交流	合計
1年	28	7 (25.0)	3 (10.7)	16 (57.1)	5 (17.9)	5 (17.9)	3 (10.7)	1 (3.6)	40 (142.9)
2年	56	13 (23.2)	2 (3.6)	18 (32.1)	24 (42.9)	28 (50.0)	4 (7.1)	4 (7.1)	93 (166.1)
3年	8	1 (12.5)	1 (12.5)	5 (62.5)	3 (37.5)	5 (62.5)	0 (0.0)	2 (25.0)	17 (212.5)
4年	13	1 (7.7)	2 (15.4)	5 (38.5)	3 (23.1)	8 (61.5)	0 (0.0)	2 (15.4)	21 (161.5)
計	105	22 (21.0)	8 (7.6)	44 (41.9)	35 (33.3)	46 (43.8)	7 (6.7)	9 (8.6)	171 (162.9)

3.3 ボランティア活動への参加の動機

表5は、「ボランティア経験あり（現在活動中）」及び「ボランティア経験あり（現在非活動中）」の学生（n=105）に対しボランティア活動に関わった動機について尋ね、まとめたものである。

回答は、全11項目（1.自分が成長していく上で必要だと思うから、2.参加すること自体が楽しいから、3.やりたいことを発見したいから、4.人や社会の役に立ちたいから、5.学校で推奨されていたから、6.何となく、7.参加が義務づけられていたから、8.感謝されるのが嬉しいから、9.進学や就職に有利と思ったから、10.雰囲気が好きだから、11.その他）の中から選択してもらい、多重回答式（複数回答可）とした。なお、割合については、回答者数に対する、各ボランティア活動の参加動機を選択した人数を示している。

性別では、男性で最も高い値を示していたのは「1.自分が成長していく上で必要だと思うから」（37.2%）で、次いで「4.人や社会の役に立ちたいから」（30.8%）、「5.学校で推奨されていたから」（29.5%）であった。女性は、「4.人や社会の役に立ちたいから」（40.7%）

が最も高く、次いで「2.参加すること自体が楽しいから」（25.9%）であった。男女比較では、男性は「1.自分が成長していく上で必要だと思うから」が女性よりも高く、女性は「4.人や社会の役に立ちたいから」が男性よりも高かった。

回答者全体では、「4.人や社会の役に立ちたいから」（33.3%）、「1.自分が成長していく上で必要だと思うから」（32.4%）が他の項目と比較して高かったが、一方で約4人に1人が「5.学校で推奨されていたから」及び「7.参加が義務づけられていたから」と回答していた。これは、調査対象である至誠館大学では、大学が所在する地域やスポーツ団体等から行事やイベント、大会等の運営のサポート等を依頼されるケースが多くあり、大学は学生のボランティア活動への積極的な参加を推奨している半面、学生が所属するクラブ活動に対して依頼を求める場合や授業科目と連動するボランティア体験等もあるため、荒川ら（2006）りが課題として挙げていた「非自発性」の活動が含まれていることが示唆された。

表5 参加の動機（性別）

	n	1.自己の成長	2.楽しい	3.やりたいこと の発見	4.役に立ち たい	5.学校で推奨	6.何となく	7.参加が義務	8.感謝される のが嬉しい	9.進学・就職 に有利	10.雰囲気が 好き	11.その他	合計
男性	78	29 (37.2)	10 (12.8)	4 (5.1)	24 (30.8)	23 (29.5)	11 (14.1)	21 (26.9)	8 (10.3)	4 (5.1)	5 (6.4)	0 (0.0)	139 (178.2)
女性	27	5 (18.5)	7 (25.9)	2 (7.4)	11 (40.7)	5 (18.5)	4 (14.8)	3 (11.1)	2 (7.4)	3 (11.1)	1 (3.7)	2 (7.4)	45 (166.7)
合計	105	34 (32.4)	17 (16.2)	6 (5.7)	35 (33.3)	28 (26.7)	15 (14.3)	24 (22.9)	10 (9.5)	7 (6.7)	6 (5.7)	2 (1.9)	184 (175.2)

3.4 ボランティア観

表6は、「ボランティア経験あり（現在活動中）」及び「ボランティア経験あり（現在非活動中）」の学生（n=105）に対しボランティアやボランティア活動に対する印象・イメージについて尋ね、性別でまとめたものである（n=104）。

質問は、荒川ら（2006）りの研究等を参考にして、

16項目（1.助け合い、2.明るい、3.無償性の、4.社会貢献、5.偽善的、6.自発的、7.なくてはならない、8.自己満足、9.おせっかい、10.時間に余裕が必要、11.お金の余裕が必要、12.思いやりのある、13.自己犠牲、14.責任感、15.強制的、16.まじめ）を作成し、「とてもそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4件法で回答してもらった。

集計にあたっては、「とてもそう思う」を4点、「そう思う」を3点、「あまり思わない」を2点、「全く思わない」を1点として得点化し、平均値の差異を求めた。

男女間で有意な差がみられたのは、「5.偽善的」(t=2.370 p<0.020)、「11.お金に余裕が必要」(t=2.214 p<0.029)、「13.自己犠牲」(t=2.477 p<0.016)の3項目で、女性よりも男性が高い値を示していた。

全体的にみると、「1.助け合い」「2.明るい」「3.無償性の」「4.社会貢献」「6.自発的」「7.なくてはならない」「12.思いやりのある」「14.責任感」の8項目については平均値が3点を超えており、ボランティア

やボランティア活動に対して好印象を持っている学生が多いことが判った。

なお、「5.偽善的」「8.自己満足」「9.おせっかい」「11.お金に余裕が必要」「13.自己犠牲」「15.強制的」の6項目については平均値が2.5点前後であり、そう感じている学生もいれば、否定的な印象を持っている学生もいることが判った。

表6 ボランティア活動に対する印象・イメージ

	(n)	平均値	標準偏差	t	df	有意確率
①助け合い	男性 77	3.64	0.54	.996	102	.322
	女性 27	3.52	0.51			
②明るい	男性 77	3.30	0.65	-.241	102	.810
	女性 27	3.33	0.62			
③無償性の	男性 77	3.19	0.69	-1.324	102	.189
	女性 27	3.41	0.80			
④社会貢献	男性 77	3.53	0.70	-.665	102	.507
	女性 27	3.63	0.49			
⑤偽善的	男性 77	2.39	0.96	2.370	102	.020 *
	女性 27	1.89	0.89			
⑥自発的	男性 77	3.23	0.78	-.613	102	.541
	女性 27	3.33	0.56			
⑦なくてはならない	男性 77	3.26	0.70	.003	102	.998
	女性 27	3.26	0.66			
⑧自己満足	男性 77	2.78	0.97	1.227	102	.222
	女性 27	2.52	0.89			
⑨おせっかい	男性 77	2.14	0.85	.160	102	.873
	女性 27	2.11	0.97			
⑩時間に余裕が必要	男性 77	3.09	0.73	.316	102	.753
	女性 27	3.04	0.85			
⑪お金に余裕が必要	男性 77	2.70	0.86	2.214	102	.029 *
	女性 27	2.26	0.98			
⑫思いやりのある	男性 77	3.43	0.66	-.645	102	.520
	女性 27	3.52	0.51			
⑬自己犠牲	男性 77	2.86	0.97	2.447	102	.016 *
	女性 27	2.33	0.92			
⑭責任感	男性 77	3.22	0.79	-.875	102	.383
	女性 27	3.37	0.69			
⑮強制的	男性 77	2.30	0.92	1.238	102	.219
	女性 27	2.04	1.02			
⑯まじめ	男性 77	3.10	0.77	.821	102	.414
	女性 27	2.96	0.76			

* p < 0.05

4 まとめ

本研究は、至誠館大学萩キャンパスに所属する全学生を対象として、1.ボランティア活動への参加の実態、2.ボランティア活動種、3.ボランティア活動への参加の動機、4.ボランティア観について、それらの実態を把握することを目的としていた。

1.ボランティア活動への参加の実態については、有効回答者全員が何らかのボランティア活動経験があり、先行研究等で報告されている参加経験率よりも高いことが判った。反面、現在もボランティア活動に参画している学生は2割程度であった。

2.参加したことのある、或いは現在活動しているボランティアの種類(分野)については、「教育・文化・スポーツボランティア」「自然環境ボランティア」活動への参加が高く、本調査時の聞き取りでは、大学所在市で開催されるスポーツ行事へのスタッフ参加や、市や地域が主催する地域清掃活動や海浜清掃活動への参加、履修している科目内で実施される校外実習等が主な活動内容であった。

3.ボランティア活動への参加の動機については、男性は「自分が成長していく上で必要だと思うから」「人や社会の役に立ちたいから」、女性は「人や社会の役に立ちたいから」「参加すること自体が楽しいから」が主な動機であり、ボランティア活動に対する自発的な参加意識がみられた反面、「参加が義務づけられていたから」と回答した学生が2割程度おり、非自発的な参加の実態も浮き彫りとなった。

4.ボランティア観については、全体的にボランティアやボランティア活動に対し好意的な印象を持っていた。半面、ボランティア活動には自己犠牲を伴ったり、或いは強制的、おせっかい、自己満足、偽善的と感じている学生もみられた。

今後の課題として、荒川らが指摘しているように、「次世代を担う現代の若者の「ボランティア観」を知ること、わが国のボランティア活動が抱える課題の明確化に繋がり、その発展に必要な手がかりを得るこ

とができる」と考えられる。ボランティア経験率の高い本学学生の特徴、及び、全国に先んじて開講されている「スポーツボランティア論・演習」等関連科目を有している大学の特色をさらに充実させるべく、このような研究を継続していくことが重要である。

[註]

註1) 正式名称は「第32回オリンピック競技大会(英文名称: Games of the XXXII Olympiad)」並びに「東京2020パラリンピック競技大会(英文名称: Tokyo 2020 Paralympic Games)」。

註2) 新国立競技場またはオリンピックスタジアム(英文名称: Olympic Stadium)は、国立霞ヶ丘陸上競技場の全面立替工事によって建設される競技場。

註3) 事例を挙げると、順天堂大学(東京都文京区)では2015(平成27)年度から『スポーツボランティアの進め方講座』が開講されており、2017(平成29)年度からは至誠館大学(山口県萩市)や亜細亜大学(東京都武蔵野市)において、『スポーツボランティア論』『スポーツボランティア演習』といったスポーツボランティアに特化した授業を開講しているところがある。

[引用文献]

引1) 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会(2019)「東京2020大会ボランティアの応募者数について」

<https://tokyo2020.org/jp/special/volunteer/news/notice/20190124-01.html> (アクセス日 2019.11.1)

引2) 中央社会福祉審議会(1993)「ボランティア活動の中長期的な振興方策について(意見具申)」

http://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryu/no.13/data/s_hiryu/syakaifukushi/475.pdf (アクセス日 2019.11.1)

- 引3) 東京ボランティア・市民活動センター (2019) 「ボランティア活動の4原則」
<https://www.tvac.or.jp/shiru/hajime/gensoku.html> (アクセス日 2019.11.1)
- 引4) 金子郁容 (1992) 『ボランティア：もうひとつの情報社会』岩波書店, 65-84
- 引5) 仁平典宏 (2011) 『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会, 74-77
- 引6) 仁平典宏・清水諭・友添秀則 (2017) 「ボランティアの歴史と現在：東京2020オリンピック・パラリンピックに向けて」(清水諭編 (2017) 『現代スポーツ評論』) 創文企画, 37: 15-30
- 9) 二宮雅也 (2017) 『スポーツボランティア読本：「支えるスポーツ」の魅力とは?』悠光堂
- 10) 山口康雄編 (2004) 『スポーツボランティアへの招待：新しいスポーツ文化の可能性』世界思想社
- 12) 芝崎あい (1997) 「ボランティア観とボランティア活動の関連性についての調査研究」『教育学研究 (中国四国教育学会)』43, 279-284

【参考文献】

- 1) 荒川裕美子・保住芳美・吉田浩子 (2006) 「小・中・高等学校におけるボランティア体験と大学生のボランティア観の関連」『川崎医療福祉学会誌』16 (1), 133-139
- 2) 音成陽子 (2019) 「高等学校の部活動におけるスポーツボランティアについて」『流通科学研究』19 (1), 103-112
- 3) 音成陽子 (2017) 「大学生のスポーツ・ボランティアのあり方」『流通科学研究』17 (1), 25-38
- 4) 笹川スポーツ財団編 (2016) 『スポーツライフデータ2016：スポーツライフに関する考査報告書』笹川スポーツ財団
- 5) 笹川スポーツ財団 (2018) 「スポーツライフデータ」
<http://www.ssf.or.jp/research/sldata/tabid/1335/Default.aspx> (アクセス日 2019.11.1)
- 6) 柴田謙治ほか編 (2010) 『ボランティア論：「広がり」から「深まり」へ』みらい
- 7) 田村正勝編 (2009) 『ボランティア論：共生の理念と実践』ミネルヴァ書房
- 8) 岡本營一ほか編 (2006) 『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会